

汲古一心

『仏蹟めぐり膝栗毛』(十三)

中村素堂

頂上に近く、大きな自然のまま恰好な石窟になっているところを通り、勾配のきつい石階を廻って山頂の平坦に出る。「王舎城靈鷲山頂与大比丘衆千二百五十人俱皆是阿羅漢云々」などとお経に出てくるけれど、全体でおよそ五十畳くらいの平面で、その平面の中にも大きな白い巖が斜めに突出したりしている。山下からも見えるが大体方形のかこいがレンガでやってある。歩いてわずか二十何分の路のりである。展望の広いこと、全く快適の地を選んで世尊も瞑想され、また説法されたものである。

かんかん陽の照る岩石の上に、洋服の脚を曲げて結跏し、眼をつむって見てる若い一行のひとりもある。ちよつと釈尊を味わってみたが暑いね——と、座禅のやかましい曹洞禅もややヘキエキとお見うけ申した。山下の丘陵ぞいにあるテージギルのレストハウスに着く。遅い昼食をすまして釈尊が入院治療をした病院の跡、葉園の跡、何とかの蛇神を祀る神殿の跡、と跡ばかりを見て廻ったが、この古代蛇神殿址の広い草原に、インドへ来て初めて見た美眼の少年少女十数人と二、三人の父母か教師のような人々が、ともに何かうまそうに飲食をしていた。高級ピクニックかと訊いたら、ガイド氏は今日はクリスマスだから何かその催しだろうという。異境クリスマスに逢着、チラリと喧騒の酔っぱらいのわが銀座街頭の景が脳裏をかすめる。

敬虔たる信仰を世尊にささげつくしたマカダ国王ビンバシヤラ陛下の晩年の悲劇・王嗣アジャセ王のために、幽囚の獄に崩ぜられたという『観経』一巻のものがたりの地、王舎城の牢の跡は雑木に囲まれ玉石を並べただけの空地であった。夕陽はわれわれの影をながく伸してこの牢の土の上に映している。

異邦の旅人はみな無言で、しばらくこの国王とそのイダイケ皇后のために掌を合わせていた。

夕陽を追うようにパトナ方面に向かつて、砂糖黍の畑道を走って走って一時間、雄大なるナーランダ寺の遺跡の前に下車、民家が少し点在する一村、茶店風のもの、絵葉書屋などもあって、一段高くなった地域何方坪かに黒ずんだレンガ建築の残骸の高低、芝生の美しい通路の傍に咲く日本の菊。大唐の玄奘三蔵が天竺求法の終点とめざしてきた五世紀から数百年間栄えた仏教大学の盛観はこの廢墟のなかに歴然と汲みとることができる。

当時この大学をして重からしめた学長のひとり、戒賢論師なども講じていたであろう大きな講堂、その講堂のまん中にある、何に使うのか誰も明答できなかった井戸、大きな厨房と食糧の倉、いく列にも並ぶ僧房の数、そして浴室、奥の左方にまだ相当の高さを残している塔の一部下層とその階級、またその側面にはめ込まれ刻まれた小仏龕のひとつひとつにある仏菩薩の像、七世紀のころには方という学僧が在学したというのだから広大推して知るべきである。

頭の下さそうなガイド氏は、私のたずねたキリスト在学説について自分が見ていたかのように事実だといっていたが、本地垂迹の天竺本みたいでうれしかった。

それにしても、ここでしみじみインドのレンガの歴史の古さを考えさせられ、今日なおこのレンガの家に住むこの国人の生活を見ると、長雨と暑熱に耐えなければならぬ生活が自然に要求するものの伝統なのであろうか。何としても龐大なレンガの残存量である。

忙しい時間の中で、この寺の路を挟んだ向こう側の小博物館へかけ込むととたんに閉館の報せがあるという残酷さ。一瞥とはまさにこんなことである。しかしチラと見ても約百体の仏像中三世紀からの五世紀間の石仏はみな立派で、すぐれたものは盛大な時に造顕されることとが首肯される。

このはず向かいにバリー語の研究所が見え、その路の表通りに接する角の老大樹の枝に赤く塗った丸筒のポストが紐で吊るされていた。何かほほ笑ましい工夫である。

(つづく)

『仏教書道』昭和四十一年